佐賀大農彙（Bull. Fac. Agr., Saga Univ.）99： 1 ～20（2014）

韓国における主要３茶産地形成期のリーダーの役割
－寶城郡，河東郡，済州道を事例に－

李　錦　東
（地域ビジネス開発学研究室）
平成25年12月１日　受理

The Leaders' Contribution of the Formative Period of Korea's 3 Main Tea Producing Areas

Lee, Geumdong
(Laboratory of Rural Business Development Studies)
Accepted December 1, 2013

Summary

The history of Korea's modern tea industry spans over half a century from the 1960's to the present day. This study investigated the history of the 3 main tea producing areas (Bosung County, Hadong County, Jeju Province) over a 40 year period; since the frontier farmers began tea production in the early 1960's to the beginning of the 2000's. The study highlights the contributions of the leaders of the three main tea producing areas to their formation; the beginning of Korea's tea industry, it's growth and it's industrial structure. This study was conducted on the basis of interviews with the main frontier farmers and related institutes and local governments, and with a review of related case studies.

Key Words: Korea's tea industry, tea producing area, leaders

１．は じ め に

戦後における韓国の茶業は，寺院や少数の茶人によって自生茶樹の茶葉が少量収穫加工され，流通消費されているのみであったが，1960年代に入り，先駆者達によって商業的な茶業が始まった．その後，韓国の茶業は，産地を形成しながら成長し，2010年現在，茶栽培農家数は約5, 000戸，茶栽培面積は約3, 300haとなっており，この50年間で一つの産業として復興した．

韓国の主要３茶産地である全羅南道寶城郡・慶尚南道河東郡・済州特別自治道では，茶業が各々の個性をもち発展してきたが，2007年以降国内茶市場の沈滞という苦境におかれ，各産地は茶業の活性化に向けて国内販路の拡大，世界市場への展開を図るなど多様に取り組んでいる．

関連して，産地形成や産地活性化に関する研究は，多様に展開されてきたが，韓国茶産地の形成や産地対応に関する研究は数少ない[1)]．とくに韓国の主要３産地は[2)]，商業的な生産者のいないゼロからの出発であるうえ，産地形成の過程を明らかにする必要があるが，関連研究は皆無である．

そこで，本研究は，韓国の近代茶業が胎動した1960年頃から2000年代初頭までの約40年間[3)]，

主要３茶産地を対象に，韓国茶業の関連研究及び文献，各産地の先駆者を初めとするリーダー[4]，及び関連機関の聞取り調査に基づき，韓国茶業の特徴及び各産地の産地形成の過程を検討する．

以下では，まず第２節と第３節で韓国茶業の概要，韓国茶業の歴史及び時期別特徴を明らかにする．次に第４節と第５節と第６節で，寶城郡・河東郡・済州道の別に，商業的生産者のいない状態から茶業を始めた先駆者や産地形成に大きな役割を果たしたリーダーに注目し，彼らが茶業を始めた動機，技術の獲得，産地組織づくりへの働きなどを検討する．最後に，第７節では，以上の検討を踏まえ，1960年代以降から2000年代初めまでの韓国の茶業をまとめる．

２．韓国の茶業の概要

⑴　茶栽培の北限と茶産地の立地特徴

2000年現在，道別の茶園面積シェアは，全羅南道が約63%，慶尚南道が約26%，済州特別自治道が約10%となっている．韓国で主に産地の単位として取り上げられる市郡レベルでは，全羅南道寶城郡と慶尚南道河東郡と済州道西歸浦市が茶の主要３産地である．３産地の茶園面積と茶農家数及び１戸当たりの茶園面積は，寶城郡が425ha，158戸，2.69ha／１戸，河東郡が346ha，985戸，0.35ha／１戸，済州道が１社の155ha である[5]（表１）．

韓国における自生茶樹の北限は，冬季の平均気温が－１℃～－２℃の地域と考えられ，全羅北道井邑市が北限として知られている[6]（図１）．

茶の栽培には，年間1300ml 以上の降雨量や茶園の土壌なども重要な要素となるが，茶の路地栽培が可能な地域の降雨量は大体1300ml 以上である．

一方，主要３産地茶園の各々の土壌や傾斜度には特性がみられる．寶城郡に所在する緑茶研究所によると，寶城郡の土壌は壌土であり，平坦地では排水性があまりよくなく，郡の茶園は主に10°から25°以下の傾斜地に造成された．河東郡は平坦地の少ない準山間地であり，土壌は壌土である．河東郡の茶園は主に傾斜度の10°から40°までの（山）斜面に立地している．済州

---

[1] 韓国茶業関連の研究に，森田明雄，岸本浩志「韓国全羅南道を中心とした茶業の現状」『静岡県茶業試験場研究報告』通号20，1996年３月，pp. 57-64．李珍鎬「韓国の緑茶産業　韓国茶業の現状と先進的茶業を追求する粧源産業（株）の取り組み」『茶』第55巻第２号，2002年２月，pp. 22-27．柿原昇「韓国の茶栽培－緑茶観光農園大韓茶園を訪ねる－」『地理』第55巻第６号，2010年６月，pp. 109-113などがある．

[2] 日本国内では，農業産地を生産・流通技術の発達段階，産地組織の有無などによって「単なる産地」，「特産地」，「主産地」などに区分されてきた．同区分は国内における環境や関連政策及び法律などが前提となっており，他国の産地まで外延を拡大するためには，その前提を再考する必要がある．本稿では「産地は特定品目（茶）を相当量生産する地域」とし，現に実在する韓国の主要３茶産地を取り上げ，各産地形成の過程を明らかにする．３産地がどういう「産地」なのか，１社による済州道の茶業をどう位置づけるか等々の議論は，他の研究に委ねる．

[3] 2000年代以降における韓国の茶業は，1990年代末農家の茶栽培への経営的な期待による茶栽培農家数の急増，2007年少数の緑茶商品からの残留農薬の検出という報道，それに伴う風評被害，茶消費の激減など，以前の40年間とは区分して考察する必要がある．2000年代における主要３茶産地の産地対応については，李・辻の参考文献［４］，［５］，［６］参照．

[4] リーダーの定義は多様であるが，本稿では，産地形成の過程で，産地内で最初に茶の商業的栽培加工を試みた先駆者をはじめ，産地に栽培技術や関連技術などを波及した者・産地に作目班などの組織を構築するなど産地形成に多くの影響力を及ぼした者などを指す．

[5] 当該期間における済州道の茶業は１社によるものであり，市郡レベルに分離しない．一方，「済州茶園」が1996年から漢拏山に茶園の開墾を始めたが，表１には集計されていない．

[6] 自生茶樹の北限は，冬季の最低気温－14℃を基準にするなどの異論もある．茶栽培地は，近年の地球温暖化，2000年代以降の南海岸以北の自治体による茶業奨励，地域篤農家の施設茶栽培等を背景に，まだその面積は少ないが，忠青南道や江原道など全国に広がりを見せている．

表１　韓国茶産地の概要（2000年）

（単位：ha，t，戸）

	地域	栽培面積	生産量	農家数
光州広域市		10	5	1
全羅南道	寶城郡	425	650	158
	求禮郡	183	25	660
	順天市	135	10	32
	康津郡	47	125	5
	光陽市	45	37	388
	海南郡	43	65	7
	靈岩郡	29	35	6
	長興郡	14	－	9
	その他	25	26	34
	小計	946	973	1，299
慶尚南道	河東郡	346	250	985
	山清郡	32	11	87
	泗川市	9	6	2
	小計	387	267	1，074
済州道	西帰浦市	48	124	1
	南済州郡	107	272	
	小計	155	396	1
全羅北道		7	5	4
合計		1，505	1，731	2，378

資料：寶城郡緑茶研究所 HP より
注１）2000年の済州道の生産者は１社である．
2006年西帰浦市と南済州郡は合併し，西帰浦市となった．

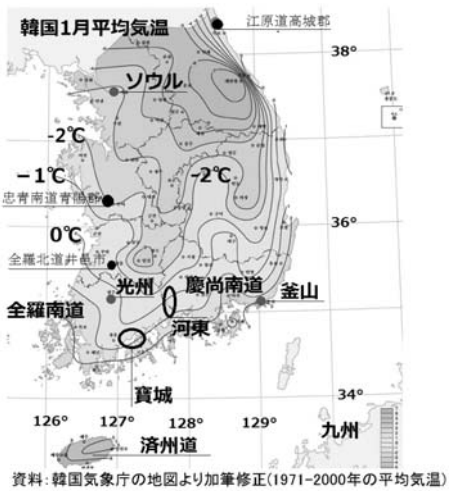

図１　韓国主要茶産地，茶栽培の北限

道の茶園は，韓国屈指の大企業㈱太平洋（粧源産業）[7]が1980年代及び1990年代に，排水性のいい火山灰土地域の傾斜度５°以下の平坦荒れ地を大規模に開墾したものである．

⑵　韓国における茶の分類

韓国における茶の分類はまだ統一された基準がなく，産地や生産者によってまちまちである．

その中で，茶葉摘採期による分類をみると，大まかに24節気別基準と収穫回数別基準がある．前者は，①清明茶（４月５日頃に収穫），②雨前茶（４月20日以前に収穫），③穀雨茶（４月20日以降に収穫），④立夏茶（５月６日以降に収穫），⑤小満茶（５月21日以降に収穫）などに分類される．後者（４回の場合）は，①１番茶（４中旬から５月中旬まで），②２番茶（６月中・下旬），③３番茶（８月上・中旬），④４番茶（９月下旬から10月上旬まで）と分類される．

現在，一般的に多用される茶の分類は，５月までの摘採を１番茶とし，24節気と茶葉の大きさを考慮して①雨前茶（高級茶[8]，摘採期４月15日から４月末まで），②細雀（雀舌茶，（準）高級茶，５月上旬），③中雀（５月中旬）などとして分類している[9]（表２）．６月以降に摘採される茶は，２番茶，３番茶として分類し，摘採は主に可搬型摘採機械によって行われ，ティーバッグや工業加工用の原料として加工される．

表２　１番茶の24節気及び茶葉の大きさによる分類

名称	グレード	摘採時期	摘採方法
①雨前	高級茶	４月15日から４月末まで	手摘み
②細雀（雀舌とも）	（準）高級茶	５月上旬	手摘み
③中雀	準高級茶	５月中旬	手摘み
④大雀		５月下旬	

資料：聞取り調査

茶の加工方法によっては，蒸製茶（機械製茶），釜炒茶（機械製，手製），玉緑茶，抹茶，玄米緑茶として分類している．発酵の有無では，主に緑茶と発酵茶として２つに分類している[10]．

---

[7] 現在の㈱アモーレパシフィックグループであり，系列に㈱アモーレパシフィック，㈱太平洋製薬，㈱innisfree（化粧品），㈱Etude（化粧品），㈱Amos　Professional（毛髪），㈱粧源（緑茶），㈱パシフィックパッケージ等がある．前身の太平洋化学工業社は1945年創立され，1987年太平洋化学㈱に，1993年㈱太平洋に成長した．2007年持株会社体制へ転換し，2011年現在の商号となった．一方，1974年創立の粧源産業は，緑茶栽培と販売等が主要事業であったが，2005年㈱太平洋に合併され，2007年持株会社の緑茶事業分離方針によって緑茶専門企業の㈱粧源となった．㈱太平洋の2002年売上は１兆575億ウォンで，約80％は化粧品，約13％は生活用品（シャンプ等），約７％（700億ウォン）は健康事業部（主に緑茶）が占める．

[8] 韓国公認の高級茶（リーフ茶）基準はないが，主に早い茶時期に手摘み釜炒製茶の「雨前」と「細雀」が高級茶として通用されている．特に手製の釜炒茶は，茶を淹れた時の水色が黄緑色，香りがたち，あっさりした味で，韓国の茶人によって好まれている．

[9] 現在，多用される茶分類名称と24節気との時期的な「ずれ」は，問題点として指摘できる．清明茶は気候上時期が早く，大雀は採算性（人件費と販売価）がなく殆ど製造されていない．

[10] 発酵茶は中国茶分類を参考に白茶・黄茶・青茶・紅茶と分類する者もいるが，茶加工業者は殆ど発酵茶（大半が紅茶）として販売する．

３．韓国の茶業の歴史

⑴　朝鮮後期の茶文化復興，植民地時期の茶園開拓

韓国における茶文化[11]の歴史は長く，高句麗・百済・新羅時代，高麗時代の茶関連遺跡や遺物や文献が多く残っている．また，今日常用される茶関連の言葉も多く，「茶禮」もその一つである．茶禮には，一般的に茶を飲むこと，接客の茶礼，元旦や中秋節などに行う先祖供養の儀式など多義にわたり，民族文化の重要な位置を占めている．

一方，茶生産及び茶消費は，朝鮮時代（1392年開国）の儒教を崇め仏教を抑圧する政策，茶産地の官僚による茶農家への過度な課税などの諸要因によって衰退した．茶文化は限られた地域で僧侶や少数の茶人，民間療法の薬剤として細々と命脈が維持されていた．

朝鮮後期（1637-1897年）にはいり，「鄭若鏞[12]」，「草衣禅師[13]」，「金正喜[14]」の登場によって，茶文化はある程度復興した．鄭若鏞は1818年「茶神契」を組織し飲茶をすすめた．鄭若鏞と交流のあった草衣禅師は「朝鮮の茶道」の思想を確立させ，金正喜など文人らの活動によって茶文化は広まった．当時，製茶は全羅南道海南郡「大興寺」，求禮郡智異山の「華厳寺」，慶尚南道河東郡の智異山の「雙磎寺」等の寺院の周辺で行われたが，その量は少量であった．

20世紀の日本帝国植民地時代（1910-1945年）には，日本人による茶園の造成もあった．その代表的な事例を３つあげると，第１に1911年鳥取県出身の尾崎市三が光州市無等山「證心寺」付近の斜面に野生茶園を15年間賃借して始めた「無等茶園」である．尾崎は，さらに1912年７haの茶園を購入し，静岡式製茶施設を揃えて製茶を始めた．第２に全羅北道井邑市では，1913年小川○○が90aの小川茶園を造成し，「川原茶」を作り大阪へ輸出した．第３に1939年朝鮮総督府林業試験場の場長であった鏑木徳仁の提案によって「尼崎関西ペイント株式会社（京城化学）」が朝鮮における日本式茶道の普及に伴う茶消費増加に対して，茶供給を増やすために全羅南道寶城郡に30haの茶園を造成した．1941年，紅茶用品種ベニホマレも植栽したが，茶が本格的に生産される前に1945年８月光復を迎えた[15]．この時代，日本式茶道も教育されたが，光復とともに終焉した．

⑵　戦後茶業の胎動，1960年代の紅茶ブームと茶園造成

１）戦後におけるコーヒー及び輸入紅茶の消費拡大，国産茶運動

戦後から1950年代まで国内の茶は，僧侶や茶愛好家によって南海岸地域の寺院などで製造された釜炒緑茶及び発酵茶が少量消費されていて，茶の消費構造は狭隘で特殊であった．そして，

---

[11] 飲茶には，儀式や文化，食生活などの側面がある．韓国における水分の取り方は，①綺麗な井戸水（特別な処理なしに飲用），②古くから発達している各種汁物の多い食事，③ご飯のオコゲに水を入れ沸かしたスンニュン，④茶（代用茶を含む）の飲用からであった．代用茶とは「大麦，ハトムギ，ヱビスグサの種子，花梨，柚子，枸杞，五味子，ナツメ，生姜，葛根，高麗人参，アマドコロ，桂皮，柿の葉，ヒメウコギ，ヨモギ」等々を利用した飲み物である．以下，茶は断りがない場合，茶葉（Camellia Sinensis）を利用した茶を指す．

[12] 鄭若鏞（1762-1836年）は，朝鮮の実学者，政治家である．全羅南道康津郡で朝鮮の「実学思想」を集大成した．雅号を「茶山」といい，『東茶記』，『茶務』を著述するなど茶を楽しんだ．

[13] 草衣禅師（1786-1866年）は，全羅南道海南郡大興寺の僧侶（住職13代目）である．韓国茶道復興の祖，「茶禅一味」思想，著書に『茶神傳（1830年）』，『東茶頌（1837年）』などがある．

[14] 金正喜（1786-1856年）は，朝鮮「金石學」の祖・書画に長けた文人・政治家であり，雅号に「苦茶老人」，「茶門」，「一爐香室」などがある．

[15] 1999年農村経済研究院の資料，本稿はジョンビョンチュン「歴史からみる茶産業発展遅延の要因と反省」韓国アグリウェルビーイング研究所資料より再引用した．井邑市の小川の名は不明である．

戦後，朝鮮戦争期間[16]，休戦成立以降における米軍の役割は大きく，アメリカ文化の輸入も盛んになり，コーヒーや輸入紅茶市場も急速に拡大した．1950年代後半，喫茶店の１，２番の売れ筋商品は，コーヒーと紅茶の輸入品であり，緑茶や代用茶などの国産茶シェアは低かった[17]．

戦争で廃墟化した貧困国でコーヒー等の消費財輸入による外貨流出は問題視され，政府は外貨節約のためにコーヒー輸入を抑制する一方，国産茶振興のために「伝統茶増産５ヶ年計画（1958-1962年）」を樹立したが，名ばかりで支援は殆どなかった[18]．

２）茶業の胎動，1960年代の茶園造成

戦後，光州市の茶人「毅齊[19]」は，無等山證心寺の茶園を関税庁から払下げ，「三愛茶園」として改称し，「春雪茶」などを作った．

また，1950年代後半，朝鮮戦争以降の復興に際して，茶業の可能性を予見した先駆者達が現れた．寶城郡では1957年「大韓紅茶株式会社」が設立され，河東郡では1960年頃先駆者達が野生茶園を利用して茶業を起こそうとした（寶城郡及び河東郡で詳述）．

その後，1961年５月クーデターによって成立した「朴正熙」軍事独裁政権（1961-1979年）は，同年９月「外来品特別取締法」を制定し，紅茶輸入の全面禁止とコーヒーの輸入制限を実施した．この輸入抑制による国産品奨励は，国内茶業の振興につながり，紅茶製茶業者が現れ，既存紅茶消費者の需要は国産紅茶に集中した．当時，国内茶園面積は寶城郡の30余 ha と河東郡などの自生茶園にすぎず，紅茶の供給は絶対的に不足していた．この供給不足の状態は，茶の品質悪化につながり，1966年頃硬い茶葉で製茶した粗悪な紅茶も流通した．粗悪な紅茶流通は，やがて社会問題化し，政府はコーヒーなどの輸入制限を緩和した．また，同時期，輸入紅茶に替わる代用茶の枸杞茶，高麗人蔘茶，雙和（サンファ）茶などが積極的に導入された[20]．

政府は1969年から「第１次農漁村特別所得事業」で開墾や植栽費を補助しながら，茶園造成をすすめ，第１次事業で総680ha の茶園を造成した．茶園造成への支援は，「第２次農漁村特別所得事業」でも継続され，支援８年目にあたる1976年国内の茶園総面積は840ha となっており，飛躍的に成長した．さらに，1977年の「第３次農漁村特別所得事業（セマウル所得増大事業）」にも茶が含まれ，茶園の拡張が図られた．しかし，1976年及び1977年の強烈な寒波による茶樹の凍死などが原因となり，1978年の茶園面積は520ha となった[21]．

⑶　1970年代から1980年代，大企業の茶生産流通への参入，茶文化普及努力

１）1970年代の緑茶製造，大企業の茶流通業への参入

1960年代及び1970年代初め，茶は主に紅茶が製造された．先駆者達は1970年代初めに緑茶の開発を模索し，1973年から1974年にかけて，大韓茶業，東洋紅茶，韓国製茶，花開製茶などが緑茶生産体制へシフトした[22]．

---

[16] 朝鮮戦争（1950年６月から1953年７月まで）は，国民の生活や産業を大きく破壊した．

[17] コーヒーの輸入は，戦後本格化し，その輸入量は増え続けた．韓国食品産業研究院の2006年資料によるコーヒーの輸入額は，1967年44万ドル，1976年587万ドルへと増加した．

[18] 1999年農村経済研究院資料．ジョンビョンチュン（同上）より再引用．

[19] 毅齊（1891-1977年）は，本名は許百錬，韓国画家・茶道家・教育家であり，1947年農業学校「三愛学園（1953年光州農業高等技術学校へ）」を設立し，製茶，園芸，食品加工などの農村指導者を養成した．1966年無等山「三愛茶園」「春雪軒」付近で緑茶と紅茶を生産した．毅齋は慶尚南道泗川郡「多率寺」の僧侶暁堂「崔凡述（1904-1979年）」と戦後の２大茶人として言われる．一方，崔凡述は教育者・政治家などの経歴もあり，1973年『韓国の茶道』を著述した．

[20] ジョンビョンチュン，同上．

[21] ジョンビョンチュン，同上．この２年間に，茶園面積は320ha も減少した．

[22] 丁恩熙「1960～1980年代国産紅茶の生産と流通―全羅南道寶城を中心に―」圓光大学校大学院，2007年．

一方，1974年，緑茶の需要の増加に伴い，「東西食品」が茶の流通に加わった[23]．

このように国内茶業は，順調に成長していたが，1976年，悪徳企業によって紅茶に柿の葉やサツマイモの葉を混ぜた紅茶や工業用の色素で着色した「ニセ」紅茶が出回ったことによって，国産紅茶の消費は冷え込んだ[24]．

この「ニセ」紅茶のショック以降，1979年「美隆グループ」の食品販売企業の「漢南チェイン」は緑茶商品「神緑茶」の大量販売を始めた（寶城郡で詳述）．さらに，1981年，㈱太平洋化学が緑茶商品「雪緑茶」の大量販売を始めたことによって，韓国の緑茶産業は本格化し，拡大した．漢南チェインと㈱太平洋化学の主な仕入れ先は，韓国製茶であった[25]．1981年，㈱太平洋化学は，緑茶の認知度の低かった一般消費者向けに雪緑茶の TV 広告などを始めた[26]．

一方，戦後，商業的な茶業が胎動する際，茶人らの茶文化普及の努力も看過してはいけない．茶人の茶文化普及及び活性化への組織的な努力は，1966年全羅南道海南郡の「海南花卉クラブ（1979年海南茶人会へ）」結成[27]，1969年慶尚南道晋州市の「晋州茶禮会（1977年晋州茶道会，1979年晋州茶人会へ改名）」の結成，1975年「韓国茶道会」の結成などがある．さらに，1976年茶人有識者による「韓国茶人会」結成の決意及び草衣禅師の隠居地の「一枝庵」の発掘・復元への衆知が集まった．その結果，1979年「韓国茶人会」の結成，1980年一枝庵の復元が行われ，韓国茶人会は一枝庵を茶文化の聖地として情報発信した[28]．

２）1980年代の茶文化普及への努力

1980年代，政府や茶人や学界による茶普及関連政策や活動が続いた．1982年，文化広報部は「伝統茶道の総合的な振興施策発表」を行い，文教部は伝統茶道の教育指導方案を発表した．1983年には，「（社）韓国茶道協会」創立及び「茶道博物館」の開館があげられる．また，同年保健社会部が「国産茶普及施策」を施行し始めた．1985年，学界では「茶文化学会」が創立された[29]．

⑷　1990年代における茶業の成長

韓国の茶業は，1960年代茶園開拓から始まり，1960・70年代政府の支援などに伴って茶園が増加した．1970年代後半から1980年代までは停滞していたが，この時期，茶生産者や行政の努力，茶人らの茶文化啓蒙などの努力は続いていた．また，1980年代，大企業の茶大衆化への努力，1988年のソウルオリンピック開催を契機とする固有の茶文化への関心の高まりは，茶業の復興の原動力となった．

1990年代，緑茶に対する社会的な認識変化（健康食品）に伴い，茶は漸く一般消費者に知れ渡り，茶の消費量も増加した．同時期，国内の茶栽培面積と生産量は約３倍の成長を遂げた（表３）．

---

[23] 毎日経済（新聞）1974年７月18日．㈱東西食品（1968年設立）は，1970年米国Ｇ社と技術提携し，国内初のコーヒーを生産販売した．2000年代，国内インスタントコーヒー市場の約80％を占めており，緑茶・紅茶類，各種ドリンクなども生産している．2007年の売上は１兆ウォンである．系列の東西㈱は，2004年ティーバッグなど緑茶製品を生産販売し始めた．

[24] ジョンビョンチュン，同上．国民の紅茶への不信感は1980年代末まで尾を引いた．

[25] http://www.kwangju.co.kr/光州日報2012年７月10日記事．その後，㈱太平洋化学は国内最大の緑茶生産販売業者となった．美隆グループ（現在，東部グループ）は，1969年設立され，1990年韓国20大グループとなった．http://www.dongbu.co.kr.

[26]「現代茶文化歴史スケッチ23」『茶道』2006年，pp. 16-19.

[27] http://hntea.kr/zbxe/t1a5，海南茶人会のホームページ．

[28] 趙紀貞「韓国茶文化の発展過程と研究現況の考察」『第２回国際茶学術大会―韓国名茶の世界化戦略―』内部資料，2009年．

[29] 趙紀貞，同上．1983年，保健社会部に登録されている製茶業者数は12社であった．

表３　韓国緑茶栽培面積，生産量，栽培農家数の推移
（1980－2000年）

年度	栽培面積（ha）	生葉収穫量（ｔ）	10a 生葉（kg）	農家（戸，１戸当たり）		
				戸数	面積(ha)	生葉(ｔ)
1980	540	105	19	－	－	－
1985	449	476	106	92	4.88	5.17
1990	448	1,480	330	242	1.84	6.12
1992	597	3,325	557	438	1.38	7.68
1994	642	3,642	568	1,284	0.53	2.84
1996	829	3,156	380	1,171	0.71	2.7
1998	1,128	5,000	443	1,390	0.81	3.6
2000	1,491	8,000	536	2,375	0.63	3.37

資料：寶城郡内部資料（2007年）より抜粋

一方，1990年代一般消費者の茶の認識変化が起こるまで，茶産地の生産現場は，文化人や僧侶などの茶人とのつながりが強く，生産者と消費者の関係も特殊であった．その構造を大きく変えたのが，1990年代，企業の緑茶ドリンク製品の開発など，積極的な茶の大衆化への努力であった．例えば，㈱太平洋は1993年雪緑茶の缶とペットボトル商品を発売した．東西食品は1995年烏龍茶を，ロッテ７星は同年鳳凰緑茶と鳳凰烏龍茶を発売した．

1990年代以降，茶の消費構造は大きく茶人らの高級茶消費と，一般消費者のティーバッグやペットボトル・缶のドリンク製品の消費構造に大きく２分されている．

４．寶城郡の茶業

⑴　寶城茶産地における茶業の始まり

１）大韓紅茶株式会社の紅茶生産

戦後，韓国の茶業をリードした産地は，寶城郡である．寶城郡の商業的な茶業は，1957年材木商張榮燮の「大韓紅茶株式会社（現，㈱大韓茶業）」設立から始まった．郡には，自生の茶園や戦前京城化学の茶園があったが，朝鮮戦争以降放置されていた．1957年，張榮燮は海軍から京城化学茶園一帯を払い下げ，1959年茶園を管理・造成した[30]．

大韓茶業は，1962年政府の支援を受け，紅茶製茶機械を日本から輸入し，紅茶を加工・生産した[31]．同社は紅茶市場を寡占し，政府の茶園支援政策で茶園を拡大する一方，周辺の野生茶園の茶葉も買取ったが，当時の需要に追い付けなかった．

２）後発企業の参入，行政の茶園造成の奨励

前述の1961年「外来品特別取締法」施行によって，既存の輸入紅茶の需要が国産紅茶に集中したこと，1962年以降における政府から開墾面積に比例して支給される資金，及び小麦粉（配給）の獲得のために，茶の栽培が刺激された．1963年，寶城出身の弁護士劉正斗は，25ha の「東洋茶園（現，モンジュンサン茶園）」を造成した[32]．

その後，全羅南道は1969年から1973年まで「農漁民所得特別事業」の一環として茶園の開墾費用と茶樹の植栽費用の補助を行い，約450ha の茶園を造成した．同時期，寶城邑と會天面の

[30] 東亜日報1979年２月６日記事．
[31] 大韓茶園は1962年から1988年まで紅茶を生産した．
[32] 寶城郡内部資料．

一般農家90戸も茶業に参入し，山斜面に茶園を造成した．寶城郡一帯の山斜面は，土木事業に多くの人手が必要であり，関係者の知恵を集めることが重要であった．寶城郡會天面のジュヨンスン（現，ウンゴク茶園１代目）が，関係者の衆知を集めながら茶園造成をリードし，現在観光資源として利用される「茶園景観」の基礎を作った[33]．

一方，1972年大韓茶業の平坦地の「會寧第２茶園[34]」造成も大きな成果となり，同年寶城郡内の茶栽培面積は590ha となった．1973年，国内茶園面積は800ha であり，国内茶園面積の約74％を占める．

⑵　茶業を取り巻く環境の変化

１）1972年大韓茶園の緑茶輸出，1976年「ニセ」紅茶の流通

1972年，日本と台湾は外交断絶となり，日本の茶輸入商は台湾から茶の輸入ができなくなり，その代替先を求めた．「丸紅」社は，大韓茶園から1972年から1978年まで茶を輸入した．1974年，大韓茶業は丸紅社と合作で生産する緑茶を全量日本に輸出する条件で政府の承認を得て，1975年寶城地域で最初に緑茶製造許可を受け取った．当時の法律に「海外企業との合作企業は，国内企業保護のために全量輸出しなければいけない」という規定によって，当時国内最大の茶生産企業が緑茶製茶全量を輸出し，国内では紅茶の品薄状態となった．1976年の生産量は，緑茶30t 生葉150t），内需用紅茶47t（生葉235t）であった[35]．

しかし，1970年代後半，国内茶業環境は激変した．1976年悪徳企業による「ニセ」紅茶の流通が知られ，国内の紅茶消費量は激減し[36]，1977年製茶会社には約２年間生産量の在庫が残った[37]．また，1976年及び1977年の寒波により大量の茶樹が凍死した．さらに，1978年丸紅社は，韓国茶単価の１／３で契約できる台湾企業に輸入先を替えた[38]．

つまり，1970年代後半，国内茶業は，国内紅茶市場の崩壊，茶樹の凍死，輸出販路寸断という危機的な状況におかれ，開拓した茶園は廃園に追い込まれた．1970年代末，郡の茶園面積は約590ha から241ha まで減少した．この状況は1980年代まで続き，茶農家は必死の努力をするが，郡茶園の一部はソウルや釜山の寺院，河東郡の業者に売り渡された[39]．

２）韓国製茶と大企業の茶業参入，茶原料の供給

この茶業沈滞期の1970年代後半，大きな役割を果たしたのが，光州市の「韓国製茶」の徐洋元[40]である．寶城郡の茶園は全羅南道の「農漁民所得増大特別事業」によって急増したが，1970年代後半紅茶市況の悪化により，茶葉の買取は十分ではなかった．徐洋元は，1975年から寶城郡茶栽培農家54戸と10年間の契約で茶葉を買取るなど，東洋茶園も賃借経営し[41]，1980年代茶

---

[33] 寶城郡内部資料．
[34] 大韓２茶園とも呼ばれ，今日映画やCM のローケ地として多用される観光スポットである．
[35] 丁恩熙「1960～1980年代国産紅茶の生産と流通―全羅南道寶城を中心に―」圓光大学校大学院，2007年．
[36] 金ドンユン，シンヨンイン「国産紅茶の需要開発に関する研究」全南大学校，1977年．
[37] 崔ゲウォン『わが国の茶の再照明』サンヤン出版社，1982年，PP. 234-238.
[38] 趙紀貞（2009），同上．
[39] 趙紀貞（2009），同上．
[40] 丁恩熙「1960-1980年代国産紅茶生産の歴史」『韓国の紅茶歴史』2010年，PP. 44-47．徐洋元は，釜山の某社在職時にアルミの着色剤として工業用紅茶を輸入する一方，国内の茶葉も探し求め，文献を参考に全羅道を回り，27市郡200余ヵ所の野生茶樹の群落地で茶葉を買取った．徐洋元は工業用として納品しながら，飲用の紅茶も作った．製茶技術は文献と体験で独自で体得した．一方，1960-70年代，紅茶を製茶していた韓国紅茶，東洋茶園に野生茶を収集し納品する収集商もいて，彼らは野生茶葉や荒茶を収集し，製茶会社に供給した．
[41] 丁恩熙（同上）と趙紀貞（同上）によると，徐洋元は1965年から1983年にかけて全羅北道長城郡に３ha，全羅南道靈岩郡と海南郡に各々７ha，10ha の平坦地茶園を造成した．

の市況が回復するまで，寶城郡の茶業維持及び活性化に大きな役割を果たした．

同時期，緑茶が紅茶の販売困難の突破口として注目された．1978年「韓国ブリタニカ社」が伝統文化事業の一環としてリーフ茶事業部を作り，「デバッゴルイプ茶」「アフンアホプゴゲイプ茶」，「ガマグムイプ茶」や茶器などを OEM で生産し流通した[42]．

また，1970年代後半，企業家の朴東宣が中心となった緑茶消費運動グループが現れ，1979年前述の「韓国茶人会」が創立された．同年，朴東宣が経営する「漢南チェイン」は，徐洋元の韓国製茶と提携し緑茶販売事業に進出し，韓国製茶の茶を「神緑茶」として販売した．神緑茶は，韓国の茶業における緑茶製品の大量販売の嚆矢であったが，その販売は軌道に乗れずわずか１年で打ち切られた[43]．

関連して，徐洋元は1977年㈱太平洋化学の徐成換が茶業へ進出を図る際，「雪緑茶」商標を提供するなど徐成換の茶業進出を誘導した[44]．また，韓国製茶は㈱太平洋化学の茶葉の生産が軌道に乗るまで釜炒（荒）茶を提供した[45]．1981年，㈱太平洋化学は韓国製茶等の材料を利用して雪緑茶の市販を始めた．

⑶　1980－90年代，茶加工工場の増加，インフラ整備

１）茶加工施設関連法律の変更，茶加工場の増加

1980年代半ばまで，寶城郡内の緑茶加工場は２ヵ所しかなく，大部分の茶農家は生葉で販売していた．その販売先は主に粧源産業と韓国製茶であり，茶農家の茶葉の摘採は，茶加工場の買取時に限定された．一方，大韓茶園は「烽露茶」というネーミングでの販売，及び東西食品等の販売会社へ納品もあった．その他に，郡内の茶園に来園する僧侶・ソウルや釜山等の茶人への茶葉提供（茶園の近辺で製茶）もあったが，郡内には収穫できない茶園も多かった[46]．

当時，緑茶の製造は「食品衛生法」の適用下におかれ，基準施設を設置（約６千余万ウォンの資金）した後，食品加工許可を得るように規制されていた．当時，茶農家による食品許可の獲得は，資金力の面から無理であった．

1987年，寶城郡では茶生産農家が中心となった「茶農會（会長崔燕湖）」が結成された．茶農会は「緑茶加工は，厳格な法律が適用される「食品加工」行為としてみなされているが，緑茶加工は茶葉を変質しないように（発酵を抑制し）乾燥する単純作業である．したがって緑茶加工を「土産食品製造」として位置づけて，その施設設置基準を緩和するように」と当局に訴えた[47]．

1990年，食品衛生法の改定により茶加工は，土産食品製造業としてみなされ，茶葉生産農家の茶加工への新規参入ハードルが低くなり，生産者による茶加工時代が始まった．茶葉生産農家による製茶業の登録申告は，1990年２ヵ所，1991年２ヵ所，1992年に１ヵ所であり，郡内の緑茶加工場は1990年以降徐々に増えた．一方，大韓茶業は1988年約1.3億ウォン（国の補助，７千万ウォン）を投入し，工場設備を拡大した[48]．

---

[42] http://www.tour21c.com,「1980年前後の韓国茶文化史２」2007年１月３日記事．とくにカマグムイプ茶は，1980年全羅南道昇州郡楽安邑の「金芚寺」の指墟和尚が開発し，1981年保健社会部に登録し，1980年から1992年まで毎年3,000～5,000筒の緑茶を納品した．
[43] 趙紀貞（2009），同上．寶城郡内部資料．
[44] http://www.tour21c.com,「1980年前後の韓国茶文化史２」，2007年１月３日記事．
[45] 丁恩熙（同上）．徐洋元は1980年寶城郡會天面茶農家50ha 茶園を契約し，５年間韓国製茶の名義で㈱太平洋化学に納品した．
[46] 寶城郡史編纂委員会『寶城郡史』1995年
[47] 寶城郡史編纂委員会『寶城郡史』1995年
[48] 寶城郡内部資料．

２）1980年代，寶城郡民の茶業への関心－「寶城茶香祭」

寶城郡では，1970年代末から寶城茶業復活への努力が始まった．1982年，寶城邑でチョイルファンを初めとする13人は「寶城茶人会」を構成し，茶消費を喚起した．1985年５月，地域行事として「第１回寶城茶香祭」が開かれたが，「寶香茶会」の宋ボンソク等の貢献が大きかった．寶城茶香祭の目的は，茶の郷寶城郡の PR であり，祝祭期間中，茶消費促進運動も展開された[49]．

また，1988年ソウルオリンピック開催を起点に，緑茶の生産量が紅茶の生産量を超え，寶城の茶業は，新しい局面を迎えた[50]．

３）行政の努力，緑茶研究所の設立，茶加工業者の多角的な努力

1991年，全羅南道の「１邑面１特産品育成事業[51]」で，寶城郡會泉面では緑茶が選定された．この事業で製茶業者に２千万ウォンの補助金が提供され，製茶業者はこの補助金に自己負担の1.6千万ウォンを加え，選別機，殺青機２台，揉捻機１台，冷却機１台などを設置できた．

1992年，全羅南道の農村振興院が寶城茶試験場（全羅南道農業技術院緑茶研究所）を起工し，翌年竣工した．緑茶研究所は茶栽培技術及び品種改良，茶農家教育支援業務などを行っている．

1995年，農林事業として寶城郡の「特化作目生産・流通支援事業費」の支援を受け，寶城製茶は緑茶加工施設を，寶城緑茶営農組合法人（代表，イムビョンチュン）は缶の緑茶飲料の加工施設を作った．

1996年から1999年まで，寶城郡は茶園面積の拡大のために「寶城郡特殊施策事業」を推進し，茶園造成事業費として19.2億ウォンを支援した．その一環として，1996年寶城郡農産課は「凡郡民茶園造成10ヵ年計画」を樹立し，10年間で新規に300ha の茶園を造成し，茶園面積を540haまで拡大する目標で事業を推進した．

また，1997年寶城郡の「栗浦海水緑茶温泉」事業は，1994年観光農園として認可された大韓茶業の観光農園と連係し，観光客の誘致に大きな役割を果たした．

1998年には，寶城綠（茶）豚営農組合法人（代表，イムビョンチュン）が設立された．同法人は「寶城綠（茶）豚」及び「緑茶飼料で育てた豚」を登録するなど，緑茶の新商品及び新しい消費先の開発を努力した．さらに1990年代，茶農家は試飲場を開設（６ヵ所）するなど新経営方式も導入した．

⑷　小括

寶城郡の茶業は，企業家で茶業の先駆者である張榮燮が1957年に紅茶会社を作り，1960年代政府の関連政策の変化の中で，日本から紅茶製造機械や技術を導入したことによって始まった．その後先駆者による近隣地域の野生茶葉の買取，後発の茶農家が増えたことによって，その規模は拡大した．

一方，1969年からの全羅南道の「農漁民所得特別事業」による茶園造成への補助金提供は注目に値する．同時期，郡の一般農家の90戸も茶業に参入した．この際，村のリーダー的な農家のリーダーシップによって山斜面に茶園が開拓され，今日の観光資源になっている茶園（景観）が造成された．

寶城郡の茶業は，商業的な茶業が始まってから10余年間順調に成長したが，1970年代後半，

---

[49] 寶城郡内部資料．
[50] 寶城郡内部資料．
[51] 日本の「一村一品」運動に相当する．ただし，当事業以前にも1989年「寶城雀雪園」徐賛植に４千万ウォン，1991年「寶城玉露製茶」趙相来に３千万ウォンが支給された事例もある．

茶の市況が低迷し，困難に陥った．この沈滞期の寶城茶業は，光州市の韓国製茶が茶園の賃借経営や茶農家から茶葉の買取を行ったことによって支えられた．また，1985年茶香祭の開催など，寶城郡民の寶城茶への関心及び消費拡大への努力によって復活への基盤作りができた[52]．

さらに，1987年寶城郡の茶生産農家は「茶農會」を結成し，「茶生産農家が直接に茶を加工できるように」と当局に訴えた．その結果，1990年食品衛生法が改定され，茶加工は土産品加工業としてみなされ，茶葉生産農家の茶加工への参入のハードルが低くなった．1990年代，郡内の茶加工場は1990年の３ヵ所から徐々に増え，2000年19ヵ所へと増加した．

さらに，1990年代には，1994年大韓茶園が国内唯一の観光農園として認可されたこと，1997年郡の寶城栗浦海水緑茶温泉が開場したこともあり，郡内への緑茶観光客数は，劇的に増加した．また，1990年代後半，茶加工を兼ねる茶農家は茶試飲場（売場）を作るなど流通部門の努力も重ね，寶城郡の茶業は大きく前進した．

寶城郡の茶業は，先駆者によって茶業が始まり，産地リーダーに努力によって今日の茶園景観の基礎を作りながら，規模を拡大してきた．また，茶業環境変化の下，彼らは茶業関連の組織作り[53]，茶業関連法律の変更への働きかけ，産地の茶業環境の改善，茶業の多角化を進めるなど役割を果たしてきた．

5．河東郡茶業－先駆者の野生茶園開拓と小農家の追従

⑴ 1960年代，先駆者による茶業の導入

１）洪小述―花開製茶，手製製茶，機械化製茶施設導入

河東郡では，野生茶園から茶葉を摘採し発酵茶類のジェクサルを作り，民間療法の風邪薬として使用してきた歴史があったが，1950年代商業的な茶作りは殆どみられていなかった．

洪小述は[54]，戦後釜山市で洋服屋を経営していたが，1959年代金として受け取った慶尚南道泗川郡の茶が契機となり，茶の研究を始め，1960年花開面に辿りついた．製茶術は雙磎寺の趙秉坤[55]から学びながら，1961年花開洞に約3.3haの野生茶園を確保し，花開面塔里に「花開製茶（約0.7a）」を設立し，野生茶の製茶を始めた．1962年，慶尚南道の食品加工許可（紅茶）を得て，1960年代は主に紅茶を加工していた．

野生茶はその収穫量が少なく，洪小述は茶園面積を増やすために塔里の集落に畑を賃借しながら，近隣農家に茶栽培を勧め，茶葉も買取った．当時，茶栽培は紅茶ブームで他作目より所得が高く，1970年代近隣農家が茶栽培を始める大きな要因となった．

1970年前後，洪小述は河東郡で最初に揉捻機と乾燥機等を導入し，1974年頃近代的な緑茶製茶ラインを構築し，郡の茶業近代化を進めた．1979年，韓国ブリタニカの緑茶加工工場として

---

[52] 韓国の茶産地の成長には，狭隘であった茶市場が如何に拡大したのか，社会的な茶の認識変化などの環境を明らかにする必要があるが，その要因分析は他の研究に委ね，本稿では茶人の茶文化拡大への努力，産地の茶消費拡大への努力が行われていたことを記しておく．

[53] 1980年代から産地組織のプロトタイプといえる団体は作られてきた．しかし，2000年現在，まだ産地全体をカバーする組織は発足しておらず，産地としてのまとまりも弱い．

[54] 洪小述（1931年生）は，茶業における功績が認められ，2001年河東郡民文化賞，2007年「伝統食品（竹露茶）名人30号」称号や産業表彰を受けた．2006年韓国茶生産者連合会会長も歴任した．伝統食品名人制度は，1994年農産物加工産業育成法第６条によって，先祖代々固有の伝統食品を持続的に継承発展させる者を保護育成するために運営されている．

[55] 趙秉坤（1895-1964年，青波老人）は，戦前中国で生活し，光復前に帰国した．1948年雙磎寺に住み始め，漢文を教える傍ら茶（烏龍茶，ジェクサル茶等）を作ったが，殆ど売れなかった．また，趙秉坤を花開茶の元祖として称する研究者もいる．

指定された．1970年代半ば，総生産量（生葉）22t であったが，12t は国内に出荷した．その内，３t は自社で加工販売し，９t は東西食品等に納品した．残りの10t は，日本に緑茶と紅茶を各々５t ずつ輸出した．

茶園は寶城郡に約13ha，河東郡内に約６ha を所有している．寶城郡の茶園は1980年代傾斜地の茶園を購入し，茶園造成は1990年代以降にも続いた．

1970年代初頭から茶人を中心に茶作り体験を受け入れており，1980年代初頭日本 F−TV の番組「故郷紀行」にも紹介された．花開面の製茶農家は，1980年代初め花開製茶の茶作り体験をベンチマーキングし，茶作り体験は河東郡一帯に徐々に広がった．洪小述は，1996年スタートした「河東野生茶文化祝祭」[56]の創立メンバーであり，茶文化拡大にも努力している．

2012年現在，主な経営は息子が担当しており，洪小述は韓国の伝統茶の味と茶道文化を再現させるために努力を継続している．

２）戦後，韓国初の商業的な緑茶の製造－趙泰衍と金福順

金福順（1916-1992年）は，戦前大分県の茶工場で働きながら，釜炒製茶術を学び，戦後帰国し，趙泰衍（1919-1996年）と結婚した．夫婦は釜山の埠頭と食堂で働いていたが，1955年偶然手に入った日本茶が国内で茶業を始める契機となった．その後，趙泰衍は経済性のある国内の茶園を探し続け，1961年春，広い野生茶園がある花開面に辿り着いた．当時，花開には商業的な茶の加工者はおらず，野生茶園を畑として開墾する者さえもいた．趙泰衍は彼らと交渉し10万ウォンで畑とその一帯の茶樹の15年間利用権利を賃借契約した[57]．

1962年，夫婦は花開に移住し，緑茶製茶を始めた．茶葉摘採と釜炒りの労働力は集落の主婦に労賃を払い確保した[58]．製茶工場は「高麗製茶本舗」，商品は「仙茶」として命名した．1962年９月慶尚南道衛生試験所に仙茶の成分分析を依頼し，その成分分析表を貼り，販売を始めた．しかし，1962年戦後韓国初の商業用緑茶の仙茶は，殆ど売れなかった[59]．

夫婦は仙茶を作り続け，1964年の河東郡農産物品評会で２等，1996年第３回河東総合文化祭で特産物工芸部２等，1967年河東郡農産物品評会で優秀賞などを受賞し，夫婦の茶は徐々に知られ始めた．また，夫婦は，茶人の崔凡術から茶名「竹露茶」を提案され，1965年「智異山竹露茶」と「智異山雀舌茶」も発売した．1967年には，韓国初の緑茶食品製造許可を取った[60]．

1973年以降，大韓茶業，東洋紅茶，韓国製茶，花開製茶などが紅茶生産体制から緑茶製造体制に転換し，国内市場では製茶機械の蒸製茶と手製の緑茶が販売されていた．国内紅茶製造業者の緑茶大量生産は，手製緑茶生産に新たな困難を与えた．また，蒸製緑茶の生産量増加と共に伝統手製茶の種類も増え，品質も多様化した[61]．

一方，1973年，夫婦は食品製造許可の更新が必要であったが，担当公務員の怠慢によって「更新期間が既に過ぎた時点」に通知され，許可の更新が出来なかった．夫婦の製茶は無許可となり，高麗製茶の商号と仙茶の商標は使えなくなった．その後，夫婦は「竹露茶」商標で販売し

[56] 郡が主催する祝祭（2008年から民間主催へ）であり，当初，河東野生茶文化祝祭に貢献した茶農家には，郡の融資金などの優遇もあった．
[57] 鄭棟柱「（韓国）茶物語（55）」国際新聞2002年連載．1961年は洪小述が茶園を確保した年でもあるが，その順番は論じない．
[58] 夫婦の茶葉摘採及び釜炒労働者の雇用は，村人へ製茶術の学習効果もあり，河東郡の産地づくりの礎石となった．
[59] 鄭棟柱「茶物語（57）」．ラベルには「高麗名産茶」として金氏が日本で数年間製茶術を学んだこと，外国産茶より優れている茶を発明したという意味で「發明茶」等の内容も書き入れた．
[60] 鄭棟柱「茶物語（55，55，61）」．
[61] 鄭棟柱「茶物語（55）」．

ながら，商号も「ハニル製茶」，「ハルリム製茶」，「方山茶藏」に改名するなど苦難の連続であった．幸いに夫婦の茶の品質は知られており，一定の販路を確保できたこと，有名茶人による夫婦の茶業維持への励ましによって茶業を継続できた[62]．

許可証は購入できるものであったが，夫婦は経営難で購入できず無許可の状態で製茶を続けていた．1982年釜山の茶商の大量注文によって購入資金を確保し，同年，休業中の食品会社の許可証（保健社会部第47号）を購入し，許可証の名義を変更して「雙磎製茶」を設立した[63]．

現在，1994年茶業を始めた３代目が，1996年「趙泰衍家竹露茶」として茶を作っており，自生の山茶園約1.3ha，竹林の茶園約0.4ha，合計1.7ha の茶園で手製茶にこだわり，手製茶の世界化や販路拡大のために輸出にも積極的に取り組んでいる[64]．

⑵ フォロワー―1960年代から1980年代まで

１）作目班の結成と機械化－ハンバッ製茶の李昌榮

李昌榮は，1960年代初め茶業先駆者に影響され，年間10a 坪程度の茶園を開墾し拡大し，山斜面の１ha の茶園を確保した．1978年，近隣茶農家10戸で作目班「花開茶農会」を結成し，製茶と栽培の研究のために日本の先進地であった佐賀県嬉野茶産地などを見学した．それ以降，平坦地へ茶園5.3ha を造成し，1992年頃に可搬型摘採機を導入した．

2000年，蒸製茶 FA60kg Line を導入し，４月末から10月末までティーバッグ用の荒茶を製造しているが，販路確保が課題となっている．茶葉は近隣の170戸から買取が90％，自家茶園の収穫が約10％である．近隣の170戸の平均茶園面積は約22a（10a から130a 程度）である．

体験観光は，1970年代半ばから僧侶及び茶人を対象に開放してきた．現在，茶人会中心で年間約100人程度を受け入れている．

現在，２代目（30代）と共に茶業に従事しており，茶業を媒介にした地域の貢献に積極的に取り組んでおり，河東茶は高級茶としてニッチマーケットに活路を見出している[65]．

２）1980年代の作目班の構成－道心茶園の呉始栄

呉始栄の家は花開面一帯の地主であり，野生茶が自生する広い里山も所有していた．茶園は平坦地に1.7ha，斜面に6.7ha，合計8.4ha を所有しており，茶園には韓国の大茶樹（古茶樹）[66]もある．茶葉生産は，1962年趙泰衍と金福順夫婦への茶葉納品から始め，茶の加工は1970年代初頭に始めが，当時の加工は主に僧侶向けであり，商標もなかった．

1988年，呉始栄を初めとする茶農家は花開面で作目班を結成し，翌年面内の作目班は８個となった．また，1994年には，花開面内に加工場９ヶ所を設立した．このような積極的な対応にもかかわらず，花開の茶は，1990年代の茶需要増加に供給が追いつかず，９月末には品切れとなっていた．

現在，呉始栄を初めとする河東茶業の２世代目（現50－60代）経営主がメインになっている茶加工業者だけの研究会「河東茶研究会」によって韓国の高級茶の基準作りが進められている．

---

[62] 鄭棟柱「茶物語（57）」．1970年代初め，夫婦は大手から緑茶の技術移転を強く迫られていたが，協力しなかったので確執が生じていた．その後，担当公務員は間もなく死亡した．
[63] 鄭棟柱「茶物語（55）」．金憧坤の雙磎製茶（1975年）と齟齬するが，本稿では論じない．
[64] 李ジンシュ『韓国の名茶を探し求めて - 河東 - 』イルンアチム出版，2011年
[65] 李昌榮は，2000年代集落や近隣の茶農家の販路拡大のために，茶加工施設の加工及び体験者と茶農家間の茶葉を取引できる場を提供している．詳細は，李・辻の参考文献［５］参照．
[66] 道心茶園に所在する韓国最古の茶樹は，緑茶研究所の DNA 分析により，慶尚南道指定記念物第264号として登録された．道心茶園は，（社）韓国記録院により国内最初の茶栽培地として記録認証され，また，慶尚南道記念物第61号として認証登録された．

その基準作りは，2012年現在，２～３年内の完成を目標としている．

３）「雨前茶」の商品化－雙磎製茶の金憧坤[67]

金憧坤は，1975年保健社会部の茶類製造許可を得て雙磎製茶を設立し，茶業に参入した．1980年，父からの伝授の雨前茶製茶術で雨前茶を商品化し[68]，韓国茶の品質をグレードアップした[69]．茶園は，2.3haの林野に造成した茶園と先祖代々の山の10ha野生茶園がある．

金憧坤は，1970年代花開市場，釜山中央洞，ソウル仁沙洞に直売場を開設し，1980年代特産物郵便販売制度を活用した郵便販売も導入した．1990年代には（社）ハンサルリムとの独占販売契約をした．近年，高級茶の販売は，デパートの直売店32ヵ所，H・E量販店，茶人会との契約であり，ソウルに営業専門チームを派遣している．

1978年，男女30余人で「ノクサン茶人会」を結成し，緑茶の普及活動にも貢献してきた．ノクサン茶人会は，1996年から河東野生茶文化祝祭で主要な役割を果たしてきた．

体験観光は1970年代から始めており，現在５月には2000人以上の来園者がある．二男が茶業を継ぐ予定であり，現在，体験観光のクオリティーを向上させるための施設や，茶業の設備投資を増やしている．

４）緑茶名人の１号，伝統手製緑茶－朴秀根[70]

朴秀根は，1970年代半ばに茶業を始めた．家族経営で野生緑茶の茶園50aで緑茶を生産加工販売している．1996年，札幌展示会に緑茶を出品し，雨前５万ウォン／100ｇ（当時日本産緑茶　16,000ウォン／100ｇ）を日本市場への流通にチャレンジした．しかし，日本消費者は蒸製茶に嗜好があり，釜炒茶の進出は困難であった．1998年５月，第３回河東文化祝祭や第18回茶の日記念茶文化大会で当年の名茶に選定された．1999年，「（伝統手製緑茶製造）名人１号」として認定された．茶業は，息子を緑茶伝授として育てている．

５）商標登録の先導者，智異山製茶園の金デサン

金デサンは，1986年花開面凡旺里や井琴里の野生茶群落地８haを造成し，製茶園を設立した．茶園管理及び製茶術は，昇州郡楽安金芚寺の指墟和尚から教わった．その後，夫婦は韓国茶文化運動に参加しながら，1989年と1992年に花開面の虎洞山麓に工場及び茶室（26a）を造成した．1997年金デサンの他界により，息子が茶業を継承し，釜山市に直営店を経営している．

1990年代初め，商標に関する知識が乏しかった花開面の茶加工業者に先駆け，多数の商標を登録し，関係者の反発も受けた．登録しておいた「花開茶」と「道心茶」花開農協と道心茶園に商標登録権を引き渡した．1999年慶尚南道の推薦商品，2000年河東の今年の名茶及び世界名茶大会でも受賞した．2001年郵便局に入店した[71]．

⑶　河東農協花開面加工事業所－1992年茶加工工場竣工

花開農協は，1990年代河東郡で緑茶加工事業を行っていた唯一の農協であった[72]．1990年頃，花開面における茶栽培農家の取引は，加工業者及び外部業者との交渉に不利であった．また，

---

[67] 金憧坤は2006年「伝統食品（釜炒緑茶名人）名人28号」として指定された．現在，WTUの理事であり，茶関連著作活動（単著８冊出版）にも積極的である．

[68] 金憧坤と雙磎製茶ホームページによると，祖父は家業の韓医業を継ぎ，先祖代々の山に自生する野生茶樹を利用し茶を製造していた．父も家業を継ぎ，1960年代雙磎寺秘傳の「朝鮮ブナ薪（を燃料とする）鋳鉄釜の釜炒茶製造法」を習い商業的な製茶を始めたが，順調ではなかった．

[69] 1980年代初め，茶は摘採時期別に細雀・中雀・大雀として区分されていた．

[70] 朴秀根は，2001年「国際名茶評価大会」で賞を授与するなど茶の高級化を進めている．2009年，プーアル茶の「秀根気茶」を開発・商標登録し，2,500万ウォン／１kgで販売している．

[71] http://www.woonsang.co.kr 参照

[72] 2007年５月岳陽農協が茶加工施設を竣工し，２ヵ所となった．

面の零細・小規模茶農家の茶品質均一化を図る必要性も台頭していた．

関連して，1991年「茶伝統食品加工事業の基本計画」，1992年「政府支援農水産物加工育成計画」が確定され，1992年には「伝統食品開発試験事業者」にも指定された．建設資金は，国家の補助金（産地流通施設補助事業）30％と農協の出資金70％によって充当され，1993年５月，雀舌茶加工工場を竣工し，稼働し始めた．

また，花開農協は1999年「農村加工事業育成事業対象者」として認定された．2001年新基集落に第２工場が竣工された．第２工場は，荒茶加工を主にし，４か月間稼働している．第１工場は再製製茶を中心に58種類の茶を生産している．

茶葉を出荷する農家数は，流動的であり近年150戸～200戸程度である．農家の出荷量は高級茶の場合2, 3kg～50kg，ティーバッグ用の茶葉は100kg～２t 程度である．茶葉の買取は，茶農家が加工工場に持ち込んだ茶葉を工場長などが格付けして行っている．

販売は，「智異山」ブランドで農協の系統出荷を利用し，農協1, 300ヵ所，農産物流通取引センター，農協が運営するディスカウントストアの Hanaro マートに出荷を限定している．

⑷ 小括

戦後における河東郡の茶業は，1950年代後半先駆者が茶業にビジョンをもち，1960年代初頭花開面で商業的な茶葉の収穫・加工を始めたのがその起点である．先駆者らの製茶術の習得は，中国からの帰国者に学んだ事例，日本の大分県の製茶加工場で働きながら習得した事例，地域の古刹伝授の製茶術を試行錯誤で体得した事例がある．

1960年代初頭，先駆者らの茶業に触発されたフォロワーによって河東郡の茶業は拡大した．フォロワーの中で一部は，1970年代の後半から1990年代にかけて作目班や製茶加工場を結成・構築するなどリーダーシップをとった．さらに，1978年結成の作目班「花開茶農会」は，海外研修まで行うなど技術向上を図った．一方，花開農協は1990年代に入り，零細な茶農家の権益を保護するために，ようやく茶の加工を始めた．

河東郡の茶業は，2000年現在，国内の茶農家数の約41％を占める産地であるが，茶園面積のシェアは約23％，荒茶の生産量のシェアは14％しかない．郡の茶園は，山斜面に立地しており，１戸当たりの茶園面積は35a にすぎず，主に手製高級茶を作っている．郡の茶加工施設は，蒸製茶機械を導入した農協や数社を除くと，大部分が零細な釜炒茶生産施設である．集落の代表的な加工者は，小規模茶農家から茶葉を買取っており，彼らの茶業の受け皿である．

河東郡の高級茶は，栽培加工販売一貫型茶農家の独自の販路によって出荷されており，その流通経路は電話やインターネット注文で宅配便を利用する直接取引，及び直売店における販売率が高い．高級茶は，消費者との信頼関係もあり，比較的安定的な販路を確保している．

一方，ティーバッグなどの低級茶は，韓国の茶流通の大手企業数社[73]によって左右されている側面が強く，今後産地としての組織構築が求められている．

[73] 国内茶関連加工流通の主な会社は20余社であるが，㈱太平洋化学，㈱東西，㈱ロッテ７星飲料，㈱東遠 F&B，㈱東亜大塚，㈱ヘテ飲料などが，比較的に規模が大きい．

６．済州特別自治道の茶業－大企業による茶業展開

⑴　㈱太平洋化学の創業主の韓国茶業復興への意志

１）茶園の造成

㈱太平洋化学の創業主の徐成煥（1923－2003年）は，1960年代，高句麗・百済・新羅の三国時代から栄えた韓民族の茶文化が衰退していることを知って，茶文化復興への使命感を覚えた．

徐成煥は，1970年代国内で茶栽培の適地を探し求め，1978年済州の僻地である西歸浦市道順地域に辿り着き，粧源産業が茶園の開墾を始めた[74]．道順地域は，石の多い荒れ地であり，開墾期間中において旱魃や霜害もあったが，1980年26.7ha の茶園を造成し，1983年から茶生産を開始した[75]．

粧源産業は，1983年朝鮮時代の茶人金正喜のゆかりの地である西帰浦市安徳面西廣里で荒れ地を２年工程で開墾した．さらに，1995年有機農法と機械化営農のために西帰浦市南元邑漢南里の平坦地に13.3ha の茶園を造成した．1997年現在，西廣茶園は約76.7ha，道順茶園が約35ha，漢南茶園約26.7ha である[76]．

２）韓国製茶の徐洋元の助言及び先進地からの技術導入

徐成煥は，茶業を始める際，前述したように韓国製茶の徐洋元に助言を求めた．また，㈱太平洋化学は，開墾した茶園から収穫が出来るまで，韓国製茶と緑茶供給提携を結び，韓国製茶の原料で1981年から雪緑茶を販売した．その後，1983年に直営の茶園で茶を収穫加工し始め，国内最大の緑茶生産者となった．㈱太平洋化学の積極的な茶業開始が契機となって韓国の茶業は，茶の加工業者と販売業者の分業化が進んだ[77]．

1980年，粧源産業は静岡県茶園研究室長であった渡辺を招聘し，茶の栽培技術指導を受けた[78]．茶園造成には，鹿児島県と静岡県の産地を参考にしたが，とくに平坦地茶園が多い鹿児島茶産地を参考に，機械化・品種園・ヤブキタ以外の新品種植栽を心掛けた．

1987年，茶の摘採は５月初めの10日間に１番茶収穫，６月末に２番茶，８月末に３番茶，10月初めに４番茶を収穫した．約35ha の道順茶園の場合，５月初めの１番茶は，道順地域の30代から70代の女性100余名を雇用して１芯３葉を基本に摘採する．また，66余 ha の西廣茶園と合わせて，年間２万余人の摘採労働力を雇用した．２番茶以降の収穫は機械摘採を行っていた．1987年当時，粧源産業は国内緑茶生産量の70％を生産した[79]．

また，1980年代初め加工施設に加え，1988年６月南済州郡安徳面西廣里に時間当たり200kg を処理し，１日当たり約４t の雪緑茶を生産できる製茶工場を竣工した．

---

[74] 徐成煥（雅号，粧源）は，韓国の化粧品産業の祖であり，茶業会社（粧源産業）に雅号を冠した．
[75] http://www.osulloc.co.kr など．
[76] 東亜日報1997年５月30日記事．粧源産業は1982年全羅南道康津郡にも茶園を造成した．2010年現在茶園面積は道順30ha，西廣50ha，漢南65ha，康津30ha である．
[77] 鄭棟柱は「茶物語」で，この過程で資本家（販売業者）が過度な利潤を追求し，茶価が高騰したが，茶栽培農家には殆ど還元されず，販売業者だけが儲かる構造となったと指摘した．一方，丁恩熙「1960-1980年代国産紅茶の生産と流通－全羅南道寶城を中心に」圓光大学校大学院，2007年によると，1981年から1990年代半ばまでスリランカ紅茶原料を輸入して太平洋紅茶（ティーバッグ商品）として販売した．また，1997年から2000年代初めまで，英国Ｔ社の紅茶ティーバッグ（完成品）を輸入販売した．
[78] 丁恩熙（2007年），同上．渡辺○○の名は不明である．
[79] 東亜日報1987年５月７日記事．

⑵ 茶の大衆化

1）雪緑茶ブランド，テレビCM，高い市場シェア

韓国茶業における1980年代の一番大きな変化は，大企業による茶の大衆化への努力である．特に㈱太平表化学は，1981年「雪綠茶（SulLocCha）」ブランドを初めに，1981年テレビCMや「百万人無料試飲運動」，1983年月刊誌「雪綠茶」発行，国際緑茶シンポジウム，茶文化育成のための茶道教室の開講等々の啓蒙運動も行った．こういう茶の大衆化への努力は，その役割を果たしながら，国内緑茶産業の成長を先導してきた[80]．

一方，1980年代，全国大学の茶道連合会の結成や全国的な茶人組織の結成も増えた．茶文化雑誌も多数創刊され，茶文化の広報と茶産業の発展の一役を担った[81]．

2000年現在，太平洋化学の緑茶生産量は，国内緑茶生産量の64％に当たる年間約500t を生産し，国内緑茶生産を主導している．また，金額ベースでは，年間1200億ウォン規模の国内茶市場の55％シェアを占めている[82]．

2）ティーミュージアム開館とティーハウス開店，消費者拡大努力

1981年，韓国初の茶博物館の「茶芸館」を開館し，韓国茶道の祖である草衣禅師直筆の茶芸書『東茶頌』などを展示するなど，韓国茶文化究明の役割を果たしてきた[83]．

1990年代後半，茶園の観覧コースや施設はなかったが，食品関連の企業団体や大学研究訪問団を受け入れ，茶園や製茶などに関する見学機会を提供した．また，希望する一般観光客にも機会を与え，見学者の反応は，後に展望台や茶試飲場，茶博物館の施設投資への契機となった．

2001年，２代目の徐慶培は，西廣茶園に緑茶博物館「オソロックティーミュージアム[84]」を開館した．また，2004年ソウルにティーハウスを開店し，消費者と直接取引できる空間を提供した．消費者に茶を接する機会を増やせ，その積み重ねが茶の大衆化につながる．

⑶ 小括

済州道茶産地は，企業家によって茶の全国流通や国内茶文化の普及を目的としてスタートした後発産地である．粧源産業は1980年頃から2000年まで鹿児島茶産地を参考に，政府の援助を受けながら，茶園を造成した[85]．粧源産業は1980年代から雪緑茶ブランドで，機械化を進め，ティーバッグ商品等を発売し，茶の大衆化に貢献してきた．また，韓国の茶業において海外技術導入及び技術開発を通じて国内茶業における技術先導者の役割も果している．さらに，茶園の景観を活かしたミュージアムを開館するなど茶文化や茶消費者の拡大にも貢献している．

7．ま と め

以上で，戦後における韓国の茶業を取り上げ，関連文献及び主要先駆者や茶農家，関連機関への聞き取り調査などを基に，韓国茶業の歴史と茶産地の形成過程，主要産地の特徴，茶業の

---

[80] http://www.osulloc.co.kr，趙紀貞（2009年），同上．
[81] 趙紀貞（2009年），同上．
[82] 毎経新聞2000年12月14日記事．粧源産業は，中国の安徽省にも直営茶園を運営する．
[83] 趙紀貞（2009年），同上．
[84] Osulloc Tea Museum（延べ面積約17a，建築費70余億ウォン）は，１階は茶関連博物館と売場，２階は展望台であり，西廣茶園と漢拏山と山房山などが眺望できる．2010年年間入場者数は100万人（外国人約30％）を超えた．売上は毎年20％程度持続的に成長している．
[85] 東亜日報1985年６月11日．粧源産業の茶園開拓初期，西歸浦市と南済州郡に割り当てられた「国産茶農園融資支援金」約４億ウォンが粧源産業に集中し，一般農家の所得増加に結びつかなかったという批判もあった．

先駆者を初めとするリーダーの役割，茶市場及び茶文化拡大への関連者の努力を明らかにした．

戦後，韓国の商業的な茶業は，1960年代初頭に寶城郡と河東郡の先駆者によって始まり，1980年代済州道に大規模茶園を造成した大企業の茶業参入によって拡大してきた．この３茶産地は，先駆者の事業背景及び経営戦略や自治体の行政努力，産地の立地条件などによってその個性が明確である．

寶城郡では，茶業の先駆者達は，1960年代初頭に茶園の開墾，製茶技術の開発，近隣農家からの茶葉買い取りなどを通じて，茶業を成長させてきた．郡の茶業は，先駆者の大規模茶園を中心としている専業的な茶業，後発者の小規模茶業によって構成されている．茶園面積は，1960年代初め30余 ha に過ぎなかったが，1969年から1973年までの政府の「農漁村特別所得事業」などによって約590ha まで増加した．

河東郡は，1960年代初め少数の先駆者によって智異山山麓の野生茶を利用する製茶技術の開発で茶業がスタートした．1970年代，リーダー的な茶農家は近隣農家への技術移転などをリードしながら，作目班を作るなど零細小規模農家の茶業への参入を促し，その裾野を拡大した．1990年代，花開農協が茶農家の権益保護のために茶加工業に参入し，地域の一部の農家の加工や流通の受け皿になっている．2000年現在，国内の茶農家数の約41％を占める産地であるが，茶園面積のシェアは約23％，荒茶の生産量のシェアは14％しかない．郡の茶園は，山斜面に立地しており，１戸当たりの茶園面積は35a にすぎず，主に手製高級茶を作っている．

済州道では，粧源産業が1980年初に茶業を始め，1990年代までに造成した平坦地の大規模茶園で企業的経営が行われる．

時期別に韓国の茶業をみると，1950年代輸入紅茶市場の拡大，1960年代紅茶の輸入禁止などを背景に商業的な茶業が始まった．1960年代から1970年代初頭までの製茶は，主に紅茶であったが，1974年頃緑茶製茶技術が一般に広まった．また，1970年代の同時期，韓国の茶業は日本への販路も確保した．この10余年間，韓国の茶業は順調に成長し，茶園面積も840ha まで拡大した．

しかし，1970年代後半，韓国の茶業を取り巻く環境は一変した．主な環境変化は，「ニセ」紅茶流通に端を発する国産紅茶消費の低迷，日本輸出販路の消失，大寒波による茶樹の枯死被害などである．その結果，茶農家の茶園管理放棄や廃園面積が増加し，国内の茶園面積は1980年540ha まで減少した．

1980年代に入り，寶城郡は茶文化や消費市場の拡大のために「茶香祭」を開催するなど努力を重ねた．また，1980年代粧源産業による緑茶生産及び緑茶流通，国産茶の PR などは，国内茶市場拡大の効果を奏した．さらに，1988年のソウルオリンピックなど，社会的に韓国の固有の文化を再認識する気運も高まり，国産茶や韓国固有の茶道に対する認識も変化した．河東郡でも1995年民選地方自治制度が実施されてから，野生茶文化祝祭の開催など，産地をあげての各種努力を積み重ねた．

このような国の政策，各産地の先駆者の努力はもちろん，消費者である茶人らのコミットメントも，戦後狭隘で特殊ではあった茶市場を拡大させる重要な役割を果たしてきた．

しかし，多数の農業者によって茶業が行われている寶城郡及び河東郡では，1960年代から2000年代初頭まで，産地組織の基となる団体の結成及び組織作りへの取り組みはあったものの，産地組織化までは至らなかった．また，その流通構造も特殊であり，その構造改革への対応や分析が求められる．

最後に，2000年代茶業を取り巻く諸環境は，2000年代初頭の茶生産の急増，2007年の風評被害と緑茶消費の低迷など劇的な変化が起こった．2000年代以降，各産地では産地主体が茶業活

性化に向けて産地組織の構築及びその強化を図りながら，茶消費や販路の拡大といった課題解決に取り組んでいるか，2000年代以降の各産地の対応は，筆者の関連研究で分析していきたい．

謝　　辞

聞取り調査に当たり，寶城郡では生産者の方々，寶城郡茶生産者組合ソサンギュン代表理事・安建順事務局長，寶城郡庁緑茶産業課朴ヒョンウ課長・ソソンマン係長には親切なご指導及び貴重な資料のご提供を頂いた．河東郡では，河東緑茶発展委員会の金正坤事務局長，河東発酵茶営農組合法人の李根旺理事，洪小述・金憧坤・朴秀根名人，生産者の方々，花開農協の金溶濟氏ら，河東郡庁通商交流課李鐘国課長らには，多大な協力と資料の提供を頂いた．済州道では，済州大学校の趙光日氏，オソルロクティーミュージアムのＹ氏，済州道庁の羅鍾玉様，㈱粧源の雪綠茶研究所の劉主所長・李旼錫博士には親切なご案内及びご指導を頂いた．執筆に際して，佐賀大学経済学部のＳ氏及び某氏，佐賀大学農学部の辻一成准教授及び本稿の閲読者某氏からも大変有り難いご指摘及び提案を頂いた．また，久留米市在住の高橋甲四郎先生は，ご高齢で多忙でありながらも，快く時間を割いてご指導を頂いたので，ここに記して感謝の言葉を申し上げる．但し，本稿のありうる誤りや論議の責任は全て筆者にある．

参 考 文 献

1．堀田忠夫『産地間競争と主産地形成』明文書房，1974年．
2．堀田忠夫『産地生産流通論』大明堂，1995年．
3．大西尚之『産地組織のマネジメント―「コミュニティ」と「リーダー」が創り出す新たな地域農業―』東北大学出版会，2009年．
4．李錦東・辻一成「韓国伝統茶産地の活性化戦略―河東郡茶産地を事例に―」2012年度日本農業市場学会報告，配布資料（未公刊）．
5．李錦東・辻一成「韓国の茶主産地の活性化戦略―寶城郡を事例に―」『食農資源経済論集』第65巻１号2014.（印刷中）
6．LEE, Geumdong, TSUJI, Kazunari「The State and Problem of New Tea Producing Area's Tea Industry of Jeju province in S. KOREA-Case Study on Strategy of Diversification of Tea Producing Corporates (which introduce tea field tourism)－」2013年度食農資源経済学会報告，配布資料（未公刊）．